



夫婦で見る夢遙か

松本 侑壬子・ジャーナリスト

この題名は、文豪ヘミングウェイの小説／映画化作品を連想しがちだけれど、実は1990年代にフランスで大流行した歌のタイトルからきている。劇中主人公夫婦の結婚30周年のパーティーで孫たちが歌い、お祝いの品に思いを込めた意味深い歌である。南仏マルセイユに暮らす労働者一家の温かく、一本筋の通った家族愛の物語。海と潮風と太陽の街で、体の内外から温められるような勇氣と力が湧いてくる。

ミシェル（ジャン＝ピエール・ダルッサン）はこの港町で長年労働者として働いてきた。不景気で会社との労使間協議の末、労組委員長のミシェルはくじ引きで20人のリストラ対象者を選ぶが、その中には自分自身も含まれていた。委員長特権でリストラ対象から外すことをせず、全員平等に扱った結果で、惜しまれながら職場を去る。

そんな夫を妻のマリ＝クレール（アリアヌヌ・アスカリッド）は戸惑いながらも気骨ある人と思い、職探しに歩き回る夫を優しく見守る。自身ヘルパーとして働きながら、誰よりも夫を理解し愛している。ふたりの結婚30周年には家族他にリストラされた元同僚らも招き、賑やかに祝った。子や孫がお金を出しあってプレゼントしてくれたのは、かねて夫婦の憧れの「アフリカ・キリマンジャロへの旅」のチケットだった。感激に目をうるませるふたり。

ところが数日後、この家に覆面強盗2人組が押し入り、金品とキリマンジャロ行きのチケットを奪って逃げた。捕まった強盗の1人は一緒にリストラされた元同僚の青年クリストフであることがわかり、ミシエルの衝撃は大きかった。逮捕されたクリストフと面会したミシエルは、元同僚とも思えない青年の言葉に激昂、思わず殴ってしまう。だが、青年には養わねばならない幼い2人の弟がいることがわかり、それぞれの家庭の事情も知らず「平等」にくじ引きでリストラ対象者を決めることが本当に「平等」で、委員長の自分もくじで当たるのが「良心的」なやり方だったかどうか、と反省する。何とか穏便にと警察にかけあうが、事件は長ければ15年間の実刑の可能性がある犯罪として既に司法に委ねられていた。

せめても、と取り戻したチケットを払い戻して得た金を手にミシエルはクリストフの自宅に向かう。部屋は空っぽで、隣人から2人の子ども（弟）には誰も世話をする者がいない、と聞き、自らは失業者であることは承知の上で、ある決心をする。妻の了解を得なければ、と家に向かう途中に海岸にいるマリ＝クレールにばったり。思い切って口を開こうとしたとき、そこに現れたのは…。さすが夫婦の気心はあうんの呼吸で通じあい、夫の決心の前に既に妻が行動を開始していた—という、温かな結末は、実はビクトル・ユゴーの「哀れな人々」の詩や哲学者ジャン・ジョレスの理想主義に根差す。ミシエルのロッカーの内側にはゲディギャン監督の信奉するジョレスの言葉の一節が貼ってある。「勇氣とは、普通に生活しながらも、自身の人生を理解し、正確に受け止め、成長し、深みを与え、確立することである」と。

『キリマンジャロの雪』

フランス映画（107分）／
ロベール・ゲディギャン監督

6月9日より岩波ホールにてロードショー

©AGAT Films & Cie, France 3 Cinéma, 2011

